

石川栄作氏による二つの 『ニーベルンゲンの歌』研究

岩井方男

石川栄作著

—『ニーベルンゲンの歌』— 構成と内容 (郁文堂) 1992年 320頁 (図版を含む)

—『ニーベルンゲンの歌』を読む (講談社学術文庫 1482) 2001年 323頁 (図版を含む)

同一著者により約十年の間隔を置いて、『ニーベルンゲンの歌』を対象とする二冊の書物が刊行された。これらを時代順に、それぞれ『構成と内容』および『NLを読む』と略記する。前者は九州大学に提出された博士論文を公刊したものであり(『構成と内容』291頁)、後者は前著を基盤とし「それと重複する箇所も少なくない」が、対象とする読者層(学生や一般読者)を考慮して「分かりやすく」「大幅な加筆修正を施している」(『NLを読む』320頁)。両書を平等に評するのが著者に対する礼であるが、本書評掲載誌 *Waseda Blätter* の性格から、前者を主、後者を従として取り扱う。

§1 『構成と内容』の本文は序章と終章、およびそれに挟まれた十章からなっている。序章は研究史と問題提起、終章はまとめと結論である。第一章から第五章までが「第I部 作品の成立」、残りの章が「第II部 悲劇の構図」にまとめられ、シンメトリックな構造を目指した著者石川氏の意図が見て取れよう。各章ごとに「まとめ」が付けられ、理解を助けている。また章の並べ方も無理や矛盾がなく、読者はさしたる困難を覚えずに、結論に至るまでの長い道筋をたどれるに違いない。

『ニーベルンゲンの歌』以前のニーベルンゲン伝説に基づく作品は、北欧に残されている。その紹介が第一章であり、これを前提として、『ニーベルンゲンの歌』の成立史が A. Heusler の説の紹介を中心に述べられる(第二章)。次は宮廷的作品としての『ニーベルンゲンの歌』の考察に移る。叙事詩成立に際してのキューレンベルクの詩人の影響(第三章)、写本Bと宮廷的色彩の強い写本Cとの比較(第四章)、そして最後に『ニーベルンゲンの歌』の反歌ともいえる『哀歌』*Nibelungenklage* に触れて(第五章)第I部を終わる。

第II部は、宮廷的作品に特徴的な貴婦人の考察から始まる。本作品の主人公たるクリエムヒルトの、宮廷的な「愛する乙女」から前宮廷的な復讐の鬼への変化が、作品の特徴をなしている(第六章)。この変化は、もう一人の主人公ハゲネの存在抜きには語れない(第七章)。一方、彼女の変化は結婚と宴会への招待を口実とした殺人の繰り返しという作品の二重構造に反映しており、ここで前半のジーフリトと後半のリュエテゲールの役割が論じられる(第八章)。前半後半、共に二人の王妃に加えられた leit 「侮辱/悲しみ」とそれに

対する rechen「復讐」が繰り返されるが(二重構造)、「復讐」の結果は異なっている。結果の相違を知るためには、leit と rechen についての考察を加えなければならない(第九章)。多くの英雄たちが女性の rechen のために落命したが、彼らは自らの ère「名誉」のためにも戦った。ただし彼らの ère は、同時代のハルトマン作品に登場する「神の恩寵」による ère とは根本的に異なる。作品の特徴を知るためには、この相違を認識しておかねばならない(第十章)。

このように、議論の進行に間然するところがなく、この書物は Monographie として完結した論文である。また、leit と rechen についての考察や、アルトゥース・ロマンから照射して『ニーベルンゲンの歌』の特徴を際立たせる方法など、教えられる箇所も少なくない。取り上げられた多くの問題はすでに論じられており、著者の最大の功績は、その巧みな再構成の手腕にあらう。評者がこのように述べるのは、もちろん石川氏の独創性に疑念を呈しているゆえではない。再構成の方法にも独創性を認めるべきであるし、また、先行研究の咀嚼が行われていることに対する賛辞でもある。しかし残念ながら、本書には『ニーベルンゲンの歌』研究において必須の要素が抜け落ちている、と評者は考えざるをえない。それは、著者石川氏により「最近の研究状況」(9頁以下)として挙げられている研究が1960年代の一部に限られ、70年代以後の研究にはごく簡単にしか触れられていない点に明白である。1992年に公刊された研究書において、これは異様ではあるまいか。

評者の指摘したい本書の問題点は、その「凡例」に端的に現れている。その第一項を以下に示す。

1. 『ニーベルンゲンの歌』のテキストは Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage (F. A. Brockhaus) Wiesbaden 1972 の写本 B を定本とし、邦訳には相良守峯訳：ニーベルンゲンの歌(岩波文庫、全二冊)を引用するが、論述・字数の都合から表現を若干変えるところもある。

末尾に不審の念を抱かぬ人はあるまい。「...論述・字数の都合から表現を若干変えるところもある」とあるが、『構成と内容』は字数制限のある論文ではなく一冊の書物である。それにもかかわらず「字数の都合」が存在するのは不可解である。「論述の都合」が存在するとしても、誤り等を指摘する場合は別として、表現の変更は「定本」や「引用」にはふさわしくない。この部分は引用に際しての著者の良心の現れ、と考えるのが正しいのかもしれないが、言葉遣いには慎重でありたい。もちろんこれは些細な点であり、本書の根幹に関わる問題点は別にある。それを、「テキスト」と「引用」に絞って論じる。

§2 凡例前半部「『ニーベルンゲンの歌』のテキストは Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied [中略] 1972. の写本 B を定本とし...」には次のような問題がある。

まず、素朴な疑問から始めよう。なぜ著者はこのような昔の版を用いるのか。『構成と内容』は1992年、『NL.を読む』は2001年に発行されたが、使用テキストは共に1972年の

20版である。この書物は de Boor 没後、R. Wisniewski を編者にして版を重ね、1979年には21版、評者の手元にある最新版は1996年の22版である。最新版の使用は不可能であるが、なぜ石川氏は二十年も昔の版を用いて、1992年当時の最新版(21版)を無視したのか。20版は de Boor 単独編集の最後であるが、そこに著しい価値が存在しているとは思えない。しかし実は、この版には大きな存在意味がある。ところがそれは、石川氏の意図と大きく乖離している。版の新旧を評者があげつらうのは、テキストそれ自体の問題ゆえではない。各版ごとのテキストの差違は軽微であり、多少の誤植を除くと、すでに Bartsch の段階で本文は固まった、とさえいえよう。また注釈部分は F. Pfeiffer により、基礎は出来上がっている。20版の存在意義は、19版との大きな編集方針の転換にある。

説明のため、『構成と内容』には(なぜか)触れられていない1960年代の『ニーベルンゲンの歌』研究最大のテーマを瞥見したい。そのテーマとは写本の問題である。H. Brackert, *Beiträge zur Handschriftenkritik des Nibelungenliedes*, Berlin (de Gruyter) 1963 は、従来の(特に Braune 流の系統図を前提とした)写本の常識に、大きな衝撃を与えた。原写本 Archetypus を探るための決定的手掛かりは存在せず、また原写本と作品原初形態 Original は一致させられない、というのであるから。この衝撃を反映して、20版前書きは19版のそれとは大きく変化した。19版においては、de Boor は写本 B を基礎として『ニーベルンゲンの歌』の Urhandschrift (Archetypus) を求めようとしたが、20版の彼は、Brackert 説を「極論」と断じながらもその正当性を大筋で認めている。この時点で、編者自身により『ニーベルンゲンの歌』の「定本」(「それぞれの古典の本文の中で、その学者の研究によれば最も原姿に近いものと考えられたもの」[新明解国語辞典])という概念は捨てられてしまった。すなわち、20版は写本 B の定本であり、無論それなりに十分価値は高い。

ところが石川氏は、Braune の見解を受け入れ(『構成と内容』6頁)、「原典」あるいは「原型」に写本 B が最も近い(107, 233頁等)と述べている。したがって、著者の意を満たすには19版こそふさわしいのであり、当該箇所(凡例前半部)の内容は編者 de Boor の方針に反する。「定本」を「底本」と改めれば編者の意図には沿うであろうが、石川氏の主張には合致しない。

論文と使用テキストとのねじれは、写本 B と写本 C とを比較する第四章において危機的状況に達する。ここで用いられる「写本 C」のテキストは、これまた Brackert 説を大筋で認めた U. Hennig の手になっていて、石川氏の意図とは乖離している。評者は、この章の議論が不成功である、というつもりはない。たとえ成功を収めたにせよ、著者の意図とは異なる条件下における成功に、どれほどの学問的価値があるのか。それを問いたのである。

§3 凡例1. 後半部の内容は、既存邦訳利用の問題に関わる。この書物(公刊された博士論文!)では、「論述・字数の都合から表現を若干変えるところもある」にせよ、著者自身の訳ではなくて、他人の訳が用いられている。評者はすべての外国文学の博士論文に目を通したわけではないが、主要資料に他人による訳を採用するのはきわめて異例であろう。

『ニーベルンゲンの歌』から一例を挙げる。『構成と内容』148頁には、第2詩節の相良訳がそのまま引用されている。それをを用いて、石川氏はこの部分を次のごとく読み解く：

一行目の「生まれた」(wuohs)と三行目の「生い育った」(wart)は、成長していくクリエムヒルト像の伝記的性格を強調している。

たしかにこの箇所から、「クリエムヒルト像の伝記的性格」が読みとれるであろう。しかし、wuohs (wachsen, nhd. wachsen)に、通常理解における「生まれた」という訳語はふさわしくない。Grimm Dt. Wb. Bd. 27, Sp. 100には当該箇所が例として挙げられ、この語は詩語として「成長する、成人する」(現代のドイツ語では heranwachsen あるいは aufwachsen)の意味に用いられ、それは植物との比喩に端を発しているという。これが常識的解釈であり、もし「誕生した」という用例があれば、それを示して評者の蒙を啓いていただきたい。『ニーベルンゲンの歌』が芸術作品として岩波文庫に収められているかぎりでは、相良訳も許される。しかしそれをそのまま、学問的著作物としての論文中に引用すれば「誤訳」になってしまう。学問研究の場では、常識的解釈が最優先されるべきである。ぜひ「論述・字数の都合から表現を若干変え」て欲しかった。

一般論として、外国文学作品を論じる際、他人の翻訳の使用はもちろん許される。研究者がすべての外国語に通じることは不可能であるから。しかし主要文献に関してまで、他人の訳に敬意を払う必要はあるまい。

アイスランド語文献の既存訳利用から生じる最大の問題は表記の混乱であり、内容理解の著しい妨げとなっている。『構成と内容』21頁には『フンディング殺しのヘルギ』について「ごく簡単にその内容・特徴等」がまとめられており、「ヘズブロッド (Hödbrodd)」等と記されている。ところが、著者が同じページで言及している Neckel-Kuhn 版の Edda において、これは Hǫðbroddr である。通常ドイツ語訳では、o と a の中間音を表す ø を ö に、this の th 音を表す ð を d に転写し、格語尾 -r は無視するから、Hödbrodd の形は独訳からの引用と思われる。すると「ヘズブロッド」という日本語表記は、どこから生じたのであろうか。アイスランド語からでもなければ、ドイツ語からでもない。両者の奇妙な混合物である、としか考えようがあるまい。

アイスランド語の日本語音写はきわめて困難であるから原語に戻る必要はなく、表記は記号としてのみ機能すればよい、という意見も存在するだろう。しかし、たとえそのような意見の持ち主であっても、21頁で「ヴェルズング (Wölsung)」とあって28頁で「ヴォルズング (Völsung)」とあるのを見ては、首をかしげるのではないか。登場するのは別の物語であるが、同一人物であるのだから。著者が原典に当たれば、このような不統一は生じないはずである。

原典に当たらないことから生じる誤りを、もう一例指摘する。『構成と内容』63頁に、ブリュンヒルト伝説誕生の契機が Heusler 説 (Nibelungensage und Nibelungenlied. パラグラフ 5) にのっとって紹介されている。それは、プロコープ著『ゴート戦争』に記録されたエ

ピソードであり、ある貴婦人が水浴中に王妃を侮辱したので、王はその貴婦人の夫を非難し殺害させた。石川氏はそこで、「名前は伏せられているが、それぞれの人物がグリームヒルトとブリュンヒルト、グンテルとジークフリートにあたることは明らかである」と述べている。しかし実際に『ゴート戦争』の該当箇所にあたると、いささか事情は異なる。二人の女性の名前は伏せられているが、王と貴婦人の夫の名前は伏せられていない。しかもその後、王は護衛により暗殺されてしまう。したがって、Heuslerの説は正しいといえなくもないというレベルであるが、それは措くとして、原典に当たっていないゆえに誤りが生じたのは明らかである。

前述のとおり、すべての文献に原語で目を通すのは不可能である。ヴォルスンガ・サガの Paul Herrmann 訳 (Slg. Thule, Bd. 21) は直訳に近く、ニュアンスさえ気にしなければ使用が許される範囲内であろう。しかし、これは希な例外である。他人の訳を使う旨を明記した石川氏の、研究者としての良心は高く評価できる。ここまで手の内を明かすのは、きわめて勇気ある行為であろう。ならばさらに一步を進めて、せめて統一性だけは守って欲しかった。そうでないと、論文全体の信憑性すら疑われる。

§4 著者石川氏が、このような事情にもかかわらずアイスランド語文献を用いるのは、Heusler 流の成立史から出発して『ニーベルンゲンの歌』の構造分析を行い、それが第II部の前提となっているからである (59 頁)。この作品が二重構造である点に関しては、同趣旨の論文を書いた評者も全く異論はない。しかし、二重構造の発生を成立史から説明することに、現在、どれほどの意義があるのか。本書評は Heusler 説の当否について論じる場ではないが、この説は発表以来すでに八十有余年を経ており、多くの有力な反論が存在することだけは指摘しておく。なお、308 頁に「キーレンベルク」あるいは「キーレンベルガー」とあるが、単なる誤植であろう。

このように、『構成と内容』には学問的著作として根幹に関わる問題がある、と評者は考える。そしてそのいくつかに関しては、「大幅な加筆修正」が施されているはずの『NL. を読む』においても改善されていない。

さすがに『NL. を読む』の凡例においては、「…テキストは Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage (F. A. Brockhaus) Wiesbaden 1972. を使用し」と書かれている。学生や一般読者を対象としてくれたおかげで、「分かりやすく」なっているのはありがたいが、2001 年出版の書物においても 1972 年の版を用いている。Braune 説を信奉する著者の目には (68 頁)、いまだ Brackert の研究が映らないのであろうか。相良訳も用いられ、第 2 詩節の解釈も前著とほぼ同様である (『NL. を読む』71 頁)。また『ゴート戦争』のエピソードについても、同じ誤りが繰り返されている (34 頁)。ただしアイスランド語文献の引用部分が無くなったので、表記の不統一は目立たない。

本書においても、序に続いて、『ニーベルンゲンの歌』の成立史が述べられる (第一章)。前著の第 I 部の大部分がこの章に集約され、既述のごとく、アイスランド語文献からの引用が無くなったが、これは賢明である。『哀歌』の考察部分が省略されているのはまことに

残念であるが、議論の流れには大きな影響を与えていないし、一般読者にはなじみの薄い作品である。評者としては、Heusler 説の紹介よりも、「第五節 ニーベルンゲンの詩人」部分に重点を置いて欲しかったが、これは蜀を望むというものであろう。ただし、気になる点がある。320 頁（「あとがき」）に、『ニーベルンゲンの歌』は 1200 年に成立し、2000 年において成立以来「ちょうど」八百年経った旨が記してある。それを記念するのは著者の勝手であるが、同書 19 頁には 1200 年から 1205 年の間に「一詩人によって書き上げられた」とある。さらに 24 頁には 1200 年頃「一詩人によって作られた」とあり、61 頁には「1200 年から 1205 年の間に『ニーベルンゲンの歌』を創り上げた」とある。すなわち、この部分からは「一詩人」なる人物が 1200 年（頃）に『ニーベルンゲンの歌』を「作った」のか「創った」のかあるいは「書き上げた」のかが読みとれない。これは成立史の大問題のはずであるが。

第二章と第三章は、それぞれ『ニーベルンゲンの歌』の前半と後半の紹介と著者の解釈に当てられている。これを前提として、第四章「悲劇の二重構造」へと進む。第四章がこの書物の眼目であり、作品の二重構造が「古代ゲルマン的要素と中世騎士的要素」の二重性と重ね合わされている。これは優れた着眼点で、前著ではいささか分かりにくかった著者のイデーが、ここにはっきりと示された。

『NL を読む』には第五章として、前著にはない「ニーベルンゲン伝説の受容」が加えられている。『ニーベルンゲンの歌』がニーベルンゲン伝説の一つの現れであることを前提として、この部分は、「中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の意義と魅力とをよりいっそう深く理解するために」また「その後のニーベルンゲン伝説の受容を辿ってみる」(234 頁)のために設けられている。

ところが、十六～十八世紀の受容が話題となる第一節では、まず『ニーベルンゲンの歌』の写本 m について触れられる。『ニーベルンゲンの歌』から離れると宣言した直後に、またそこに戻るのには驚かされるが、韻文『不死身のザイフリート』、ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』、民衆本『不死身のジークフリート』の紹介と続く。第二節のテーマは、ドイツ・ロマン派による受容である。ここでは、再び『ニーベルンゲンの歌』に戻り、その再発見と当時の状況が語られる。第三節では、冒頭にニーベルンゲン伝説に基づく作品が挙げられるものの、その大半は、『ニーベルンゲンの歌』を基にした Hebbel の戯曲の紹介である（ちなみに、彼の戯曲 Die Nibelungen の訳は『ニーベルンゲン』より、『ニーベルンゲン一族』がふさわしかろう）。第四節は Wagner の『指輪』の粗筋の紹介。この作品は、もちろん『ニーベルンゲンの歌』に基づいているのではない。そして最後の第五節で、二十世紀の作品が取り扱われる。

評者は日本においても、ニーベルンゲン伝説から靈感を得た作品があることを学んだ。しかし、新たに加わったこの第五章にも、いささかの問題があることを指摘しておきたい。まず、ニーベルンゲン伝説の受容といいながら、『ニーベルンゲンの歌』の受容がかなりの部分を占めている点。これは章の標題を直せば済む。石川氏は Wagner に靈感を与えた作品として J. Grimm と Fouqué のそれを挙げているが (253 頁, 265 頁)、作曲家はエッダや

サガの内容をどのようにして知ったのか。彼の周囲の Germanist たち (特に W. Grimm) の状況に触れてあれば、この章はきわめて有用であったろうに。また、造形美術への影響も欠落している。ただしこれらは枝葉末節であり、大問題は別にある。二十世紀後半以後に『ニーベルンゲンの歌』を研究する者にとり、Nazismus の時代の『ニーベルンゲンの歌』やニーベルンゲン伝説の受容こそ、人間としてのあり方を問われる切実な問題ではなかったのか。これを欠いては、二十世紀の受容を論じたことにはなるまい。さらに、その反省に立った戦後の動向が欠如しているのは、点睛を欠くというべきである。

* * * * *

『構成と内容』に関しては、写本・原典と翻訳の取り扱い・統一性に大きな問題がある、と評者は考える。研究対象とする作品の形態が曖昧では、魅力的な議論も色褪せる。主要文献の読みを他人に任せておいて、自分の論理が展開可能であろうか。一冊の本にまとめられているにもかかわらず、表記がまちまちであってはいけない。『NL.を読む』に関しては、上記の第一と第二の問題が改善されていない点、新たに付け加わった部分がいささか不十分な点を指摘しておく。

評者はドイツ中世文学研究の隆盛を心から願う者であり、石川氏の研究に注ぐ情熱と、書物にまとめ上げる努力と、研究者としての良心には大いなる敬意を払う。しかし、以上の点からこの両書には失望した。